

『11010年 「コロナ禍歌集」』

(現代歌人協会編)

現代歌人協会会員が寄せた歌五七一首が氏名五十音順に収録されている。「はじめに」で栗木京子氏は〈文学者たちの軌跡をたどりつつ、体験を表現として残すことの意義を感じています〉と述べる。

顔隔てアクリル板で会議する肉声なく
すコロナの世界 伊志嶺節子

〈ソーシャルディスタンス〉の言葉とその対策が瞬く間に普及した。細かく管理される窮屈さを精神面と体感で表現する。

ゴッホ忌はずかに巡りこの世にはウ
イルスがあつて星屑がある 大森悦子
コロナをこんなに美しい歌にすることも
できる。詩心を忘れない大切さと思う。

咳せきすれば人波左右に割れてゆきモーゼ
のように歩みゆくわれ 笹公人

大変なときこそこの歌のようなユーモアも大事にしたい。「あとがき」で吉川宏志氏は〈パンデミックの初めの一年に、さまざまな歌人たちが、何を思い、何を考え、どう行動したか、ということが見えてくる一冊になれば〉と述べる。資料的の一面のある貴重な一冊。
(水上 美季)

田村元歌集

『昼の月』

(いりの舎)

両腕を男二人に掴まるる心地に厚きコ
ートを羽織る

生まれ変はつてもサラリーマンである
やうな冬空の下にバスを待ちをり

我を押し出さない、等身大の歌だ。細やかな心の機微を捉え、身近な題材を次々と登場させる。抑制が効き、含羞を感じさせる点も魅力だ。だが、一見恬淡とした描写

の、奥底には美意識と詩情が潜む。
白鷺がところどころに立つてゐる た

ぶん群馬を〈田〉だと思つて
テーブルでMacの画面ひらくとき妻

のMacの背と触れ合ひぬ
食と酒の歌の歌も多い。豊かな詠みぶり

に幸福感が溢れる。
はんべんがちくわの方へ流れ寄りわれ

は酔ひへと傾いてゆく
弁当の箱をかばんに仕舞ふとき口はご

飯をまだ囁んでをり
辛口の「谷川岳」を北に置きわがテー

ブルは関東平野
自身を飾らずに詠む上でも、食と酒は恰

好の題材なのだろう。
(三沢 左右)

野田かおり歌集

『風を待つ日』

(青磁社)

指先がむらさきさきさきぶの実に触れてゆ
びのさきから記憶となりぬ

時勢を感じ、世界と繋がり、記憶を司るものは何だろうか。作者にとつてその感覚器は、手であった。作者の手や指は、記憶

し、傷つき、世界を立ち上げ、思考する。
冬の木が清らに立てり黒板に「淋」と

いふ字を手が書きたれば
体温を残しゆく手は遣伝子の舐のやう

に眠りをつなぐ
曖昧な感覚や思いつきではなく、自分の

何を信じて短歌を作るか。その拠り所がし
っかりしている歌は、五感を伴って世界を

形作る。
手のひらをゆるめてゆけば春までを雪

に濡れゆく蠟梅ろうばいの黄
寒さの中、握りしめた手を緩め、春の山

を行けば出会ふ蠟梅。捕まえていないとそ
のままどこかに消えて行きそうな風情であ

りながら、作者は巡る季節の真ん中に居続
ける。定時制高校の教諭として生徒に向き

合い、自身も未来へ向かう風のただ中にあ
る歌人の、第一歌集。

(磯川 朋美)